

Imaginary Companionの定義に関する考察

友 弘 朱 音*・佐 野 秀 樹**

教育心理学

(2008年9月26日受理)

1. 先行研究

1. 1 Imaginary Companionとは

Imaginary companionは「想像上の仲間」または「空想の遊び友達」などと訳されることがあるが、それはいったいどのような現象だろうか。Imaginary Companionについての説明は田尻¹⁶⁾が分かりやすいので以下に引用したい。

「子ども時代の遊びというのは、生活の大部分であり、子どもにとってはいわば生活の中心である。幼児期の子どもは、自らの想像（創造）した世界で自発的、能動的に遊び、それらに熱中する。そのような遊びの中で、架空の誰か（空想上の）友達を作り出し、それと遊び、話すようになる時期がある。それは現実とは区別されているが、ごっこ遊びや他の遊び同様、自発的意思に基づいた現象となっている。この乳幼児期の子どもの遊びにしばしば登場する仲間、遊び友達を一般にImaginary Companion（以下IC）という。」

また、富田¹⁷⁾は、質問紙調査における5歳6ヶ月の母親からの回答にあったICについて次のような事例を報告している。

「息子には去年の夏から、『ほぼくん』『はぼくん』『ひぼくん』の三人の友達がよく遊びに来ます。特に『ほぼくん』は毎日です。（中略）『ほぼくん』は息子の等身大らしく、自分に出来ないことは全て『ほぼくん』は出来るらしいのです。例えば、鉄棒の逆上がりとか…。心の親友のような感じです。優しく、いつも助けてくれているようです。」

1. 2 ICに関する研究

ICに関する記載は古く、犬塚ら⁷⁾の文献研究によると、1892年のBurham, W. Hの論文にはすでに、この現象についての記載が見られるという。

そして、ICに関する研究は、おおまかに分けて以下の2つを柱に研究が行われてきている。

1. 2. 1 精神分析的アプローチ

精神学的アプローチにおいては、研究対象は主にクリニックで会う子ども達であったために、ICの出現はしばしば病理との関係について論じられてきた。近年においては、多重人格とICの関連について言及している研究もいくつか見られる。

しかし最近では、ICが所有者を励ましたり、相談相手になっていることなどが面接調査等で語られてきたことから、ICの肯定的側面について語られることも多くなってきている。

1. 2. 2 発達心理学的アプローチ

発達心理学的アプローチにおいては、質問紙調査を中心にICの出現率、出現時期、ICを有する子どもの社会的背景に関する研究が行われてきた。しかしながら、ICはそもそもあいまいな部分を含んだものであり、研究者により定義が異なるため、出現率や出現時期のピークについての見解は研究者により異なる。また、ICに関する研究は最近まで主に海外で行われてきたため、日本との文化差によるものも関係していると考えられる。

ICの出現率は10～30%、出現時期のピークは2歳～10歳あたりとの結果を示している研究もあるが、研究におけるICの定義の違いによりその結果には大きく差が見られるのが現状である。また、ICを有する子どもの社会的背景に関しては、犬塚ら⁷⁾の文献研究によると、ICを有する子供の性別は女兒が多く、出生順位は長子が多いとも言われているようだが、先に述べたように研究によって結果には多少のばらつきが見られる。

* 東京学芸大学大学院教育学研究科学学校心理専攻（184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1）

** 東京学芸大学教育心理学講座（184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1）

表1 国内の先行研究における調査方および出現率 (田尻, 2004)

研究者名	年	対 象	研究方法	出現率
麻生	1989	大学生	質問紙	16.20%
犬塚・佐藤・和田	1991	大学生・短大生・専門学生	質問紙	9.80%
森定	1999	大学生・短大生・専門学生	質問紙	21.00%
森定	2001	中学生	質問紙	19.00%
川戸・遠藤	2001	子どもを持つ親	質問紙, 面接調査	8.60%
川戸	2001	子どもを持つ親	質問紙	3.50%
富山・山崎	2002	子どもを持つ親	質問紙	11.70%
富山	2003	子どもを持つ親	質問紙	9.70%

表2 海外の代表的な先行研究における調査方法および出現率 (田尻, 2004)

研究者名	年	対 象	研究方法	出現率
Svendsen, M	1934	2-16歳	質問紙・観察	13.40%
Singer & Singer	1981	子ども・親	子ども：インタビューと観察 親：質問紙	対母親：65% 対子ども：55%
Taylor & Carlson	1997	子ども・親	子ども：インタビューと実験 親：インタビュー	28%
Gleason & Hartup	2000	親	インタビュー	19%

2. 定 義

2. 1 Svendsen, M.¹⁴⁾ の定義に関する考察

犬塚ら⁶⁾は、Svendsen, M.¹⁴⁾の定義を以下のように紹介している。「目に見えない人物で、名前がつけられ、他者との会話の中で話題となり、一定期間（少なくとも数ヶ月間）直接に遊ばれ、子どもにとっては実存しているかのような感じがあるが、目に見える客観的な基盤を持たない。物体を擬人化したり、自分自身が他者を演じて遊ぶ想像遊びは除外する。」

しかし、犬塚ら⁶⁾によると、「Svendsen, M.¹⁴⁾以外には明確な定義をしている者はおらず、漠然と、空想の中で作り出した遊び友達というふう捉え、Svendsen, M.¹⁴⁾が除外した想像遊びも含めて考えている研究者もいる」ため、未だにその定義は曖昧である。

しかしながら、今後の研究を発展させるにあたり他の事例と比較検討するに当たり、ICの定義を明確に定義することが必要であると思われる。では、どのようにICを定義していけばよいのだろうか。

まず、Svendsen, M.¹⁴⁾の定義について他の研究との比較より考察していきたい。

① ICは目に見えない人物である

これに対し澤ら¹³⁾は「『子どもにおける表象は大人における表象よりも生々しく強烈である。子どもは表象と

知覚を区別できないものであり、ICはこの混乱の結果生じる』といったNorsworthy, W. & Whitley, M. T. (1918)の指摘にもあるように、これが子ども（特に幼児）においてはどこまでも不明瞭である。」と述べると同時に、「実際にはICが『見えている』と陳述されることも少なくない」とも報告している。実際、田尻¹⁶⁾の研究において、ICを幼児期に持っていた大学生25名のうち9名がICを「目で見えていた」と報告している。

友弘¹⁸⁾の面接調査においても「視覚的イメージはある。人の形をしているが、顔とかはあんまりよく見えない。夢を見るのと同じ形で見えてて、細部は思い出そうとしてもよく見えない。」との発言が見られた。

よって人によっては「視覚的イメージを有する」という意味合いで「見えている」と報告するものと考えられるため、その点に注意し、「ICは視覚的イメージを有する（ただし、知覚性と表象性の区分が侵犯されたために、実際にそこにありありと見えるものとは異なる）」と定義しておく方が、今後のICの枠組みに不一致を残さないためにも望ましいと思われる。

② ICには名前が付けられている

犬塚ら⁸⁾の研究によると、特定の名前がつけられていたのが「45.0%（男子29.4%, 女子59.6%）」で、その名前を選択した理由は「物語の登場人物の名前」が一番多かったとしている。つまり、全てのICに名前がついているわけではなく、ICの名前は意識されないこともあるた

め、今後の研究においてこの条件は定義から除くことが適切であると思われる。

③ ICは他者との会話の中で話題となる

犬塚ら⁷⁾の調査では、ICの秘密性は高く、わずか11%の人が友達に、8.8%の人が大人に、想像上の仲間の存在を他者に打ち明けているだけであった。

よって、今後の研究においてこの条件は定義から除くことが適切であると思われる。

④ ICはある一定の期限(少なくとも数ヶ月の間)存在する

ICの出現時期及び消失時期についての研究は多くあるが、どのくらいの期間ICが存在するかという研究はあまりなされていない。しかし、田尻¹⁶⁾および友弘¹⁸⁾の研究においてICが数年にわたり存在することが分かる。

よって、単なる空想及び1, 2度現れただけの想像上のキャラクター等と区別されるため、上記のように定義することが適切だと思われる。

⑤ ICは直接の遊び相手となる

ICを所有する子どもは、ICと話しをしたり、一緒に遊んだりする様子が様々な調査から知られており、「ICが直接の遊び相手となる」との定義は頷ける(犬塚ら⁷⁾)。

しかしその一方で、富田¹⁷⁾は、文献研究より、児童期から青年期にかけての時期に「準宇宙(paracosm)」と呼ばれる空想の王国や世界を作りだすことがあることを報告している。富田¹³⁾はこの時期の子どもの空想の内容の複雑さに触れると同時に、「準宇宙」はしばしば仲の良いきょうだいや友人との共同作業で作られられることから、ICとは「異なる」としているが、友弘¹⁸⁾の面接調査においては「準宇宙」と思われる内容が語られており、それにおける登場人物をICと同じように検討した結果、それらがICと同じような役割を果たしている可能性が示唆された。そのため、今後の研究においてはICに「準宇宙」の登場人物を含むことが研究の発展に必要であると思われる。

よって、今後の研究においてこの条件は定義から除くことが適切であると思われる。

⑥ ICは子どもにとって実存しているかのような感じがある

澤ら¹³⁾は「それは確かに彼ら自身の空想としての性格を持つが、同時に生々しい実存感を備えた他者としての性格も備えているのである。」と述べている。

また、犬塚ら⁷⁾は文献研究を元に、ICの実存間につ

いて以下のように表現している。「ICの現象は、その実存性の強さにおいて特異な位置を占めている。ICは通常ははっきりとした概観を持っていて、視覚的イメージを伴い、身体的空間を占めることもある。たとえばICのために椅子やベットや食事のお皿を用意したり、ゲームで後を追いかけたり、直接的に話しかけたりする。また時にはあたかも相手の声が聞こえてくるように感じ、聴覚的イメージを伴っている場合もある。はっきりとした生い立ちやパーソナリティをもち、特定の名前が付けられて、いろいろな活動を一緒に行う。」

友弘¹⁸⁾の面接調査においても、ICのパーソナリティについて「やさしい。ちょっと不器用。辛いこととか、あんまり表にださない、出せない」との語りが見られ、その実存感の強さが伺える。しかし、「実存感」といった表現は研究者により解釈が異なる可能性が考えられるため、今後はこの定義を「ICが彼自身のパーソナリティを持っている」と変更し、使用することが望ましいと考える。

⑦ ICは目に見える客観的な基礎を持たない

上記の定義に対し、田尻¹⁶⁾はSingerら(1981)の研究を参考に、Svendsen, M.¹⁴⁾は、ものを人格化させた創造的な遊び(Personified Object)や、子ども自身が何かの振りをしたりする遊びはICには含まれないことを主張していたことや、何か物質がそこにあったとしても、そこに人格が付与されていれば、それをICとみなしている研究があることについて述べている。

友弘¹⁸⁾の面接調査において、ICの出現の際、モデルになった実在の人物や、漫画のキャラクターが存在していたことが語られている。これらはICの出現の際にキャラクターのモデルとなっただけであり、物質に人格が付与されたものとは異なるため、上記の定義に一応は当てはまると考えられるが、研究者によりその判断にばらつきがなるべく出ないようにするためにも、今後の研究においてこの条件は定義から除くことが適切であると思われる。

⑧ ICから自分自身が他者を演じて遊ぶ想像遊びは除外する

先に述べたように、振り遊びはICに含まれないと主張している研究者もいるが、先に述べた「準宇宙」の登場人物をICに含めて考える際、この定義との判別が語られ方によっては難しい場合があると考えられる。

よって、今後の研究においてこの条件は定義から除くことが適切であると思われる。

2. 2 今後のICの研究において、定義に加えることが望ましいと考えられる項目

今後のICの研究において、筆者が定義に加えることが望ましいと考えられる項目をDSM-IV-TR¹⁾を参考に以下に挙げる。

- ⑨ ICの所持には通常の物忘れでは説明出来ないような健忘を伴わない
- ⑩ ICの所持者は自己の同一性について混乱していない
- ⑪ ICは所有者の行動を統制することはない
- ⑫ ICは臨床的に著しい苦痛、または社会的、職業的、または他の重要な領域における機能の障害を引き起こすものではない
- ⑬ ICは物質（例：乱用薬物、投薬）または一般身体疾患（例：側頭葉てんかん）の直接的な生理学的作用によるものでもない

上記の定義は「解離性健忘」「解離性とん走」「解離性同一性障害」またその他の解離性障害及び、物質（例：乱用薬物、投薬）または一般身体疾患（例：側頭葉てんかん）の直接的な生理学的作用によるものでもないことを明らかにするために新たに加えたものである。これらに関する厳密な検討は今まで行われてきていないが、ICと思われる現象が治療場面において扱われる場合はこれらについて検討することが必要になってくると考える。

- ⑭ ICの所有者はICが現実にはいないということを意識している

この項目は、妄想との違いを区別するために新たに設けたものである。今後の研究において、妄想とICを区別するためにも、この定義を用いていくことが必要であると考える。

2. 3 今後のIC研究における定義

以上の点を踏まえ、今後青年期のICについて研究を行う場合には以下の9つの定義を用い、それに当てはまるICを有する人を研究対象とすることにより、研究ごとにICという現象そのものの枠組みに不一致を残さず、より豊かな成果を期待できると考える。

- ① ICは視覚的イメージを有する（ただし、知覚性と表象性の区分が侵犯されたために、実際にそこにありありと見えるものとは異なる）
- ② ICはある一定の期限少なくとも数ヶ月の間存在する
- ③ ICは彼自身のパーソナリティを持っている
- ④ ICの所持には通常の物忘れでは説明出来ないような健忘を伴わない

- ⑤ ICの所持者は自己の同一性について混乱していない
- ⑥ ICは所有者の行動を統制することはない
- ⑦ ICは臨床的に著しい苦痛、または社会的、職業的、または他の重要な領域における機能の障害を引き起こすものではない
- ⑧ ICは物質（例：乱用薬物、投薬）または一般身体疾患（例：側頭葉てんかん）の直接的な生理学的作用によるものでもない
- ⑨ ICの所有者はICが現実にはいないということを意識している

3. 引用・参考文献

- 1) American Psychiatric Association DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引 第1版 医学書院
- 2) 麻生武 想像の遊び友達—その多様性と現実性 相愛女子短期大学研究論集 34 3-32 1989
- 3) 麻生武 乳幼児の心理—コミュニケーションと自我の発達 初版 株式会社サイエンス社 2002
- 4) Flank W Putnam 多重人格性障害—その診断と障害 初版 株式会社岩崎学術出版社 2000
- 5) Flank W Putnam 解離—若年期における病理と治療 初版 株式会社みすず書房 2001
- 6) 井原成男 ぬいぐるみの心理学—子どもの発達と臨床心理学への招待 初版 精文堂印刷株式会社 1996
- 7) 犬塚峰子・佐藤至子・和田香誉 想像上の仲間—文献の展望 精神科治療学 5 (11) 1435-1444 1990
- 8) 犬塚峰子・佐藤至子・和田香誉 想像上の仲間に関する調査研究 児童青年精神医学とその近接領域 32 (1) 32-48 1991
- 9) 川戸由季・遠藤利彦 Imaginary Companionの実態を探る 日本教育心理学会第43回総会発表論文集 pp.224. 2002
- 10) 森定美也子 乳幼児期から青年期までの移行対象と慰める存在 臨床心理学研究, 16, 582-591 1999
- 11) 森定美也子 思春期における慰める存在 臨床心理学研究, 19 (5), 535-541 2001
- 12) Ralph B. Alison 交代人格とIIC (Internalized Imaginary Companions) との区別 国際解離研究秋季大会 1998
- 13) 澤たかこ・大饗広之・阿比留烈・古橋忠晃 青年期に見られるImaginary Companionについて 精神神経学雑誌 104 (3) 210-220 2002
- 14) Svendsen, M. Children's Imaginary Companions Archives of Neurology and Psychiatry 2 985-999 1934
- 15) 高橋三郎・大野裕・染谷俊幸(訳) DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引き 新訂版 株式会社医学書院 2002

- 16) 田尻由起 幼児期のImaginary Companionに関する研究一回
 顧調査からの検討 東京学芸大学修士論文 2004
- 17) 富田昌平 子どもの空想の友達に関する文献展望 山口芸
 術短期大学研究紀要 34 19-36 2002
- 18) 友弘朱音 青年期のImaginary Companion 東京学芸大学卒
 業論文 2005

Imaginary Companionの定義に関する考察

Examination on the Definition of Imaginary Companion

友 弘 朱 音*・佐 野 秀 樹**

Akane TOMOHIRO, Hideki SANO

教育心理学

Abstract

A factious companion who often appears in children's play is generally called Imaginary Companion (IC). The first IC was recorded in 1892 by Burham, W. H. Research on IC has been conducted by two major approaches: psychoanalysis and developmental psychology. The appearance rate of IC has been in the range between 10% and 30% depending on studies. Further, there is no researcher who defined IC clearly other than Svendsen, M. So, the definition of IC has been somewhat vague. For future research, the definitions and description of IC of Svendsen, M. and other researchers were compared and examined.

Key words: Imaginary Companion, definition of Imaginary Companion

Department of Educational Psychology, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 乳幼児期の子どもの遊びにしばしば登場する仲間、遊び友達を一般にImaginary Companion (以下IC) という。ICに関する記載は古く1892年のBurham, W. Hの論文にはこの現象についての明瞭な記載がある。ICに関する研究は、大まかには精神分析的アプローチと発達心理学的アプローチの2つを柱に行われてきた。ICの出現率は10 - 30%と、研究によりその出現率に幅がみられる。

またSvendsen, M. 以外には明確な定義をしている者はおらず、未だにその定義は曖昧であったため、今後の研究におけるICの定義についてSvendsen, M.⁴⁾の定義と他の研究における見解を比較することにより考察した。

キーワード: Imaginary Companion, Imaginary Companionの定義

* Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

** Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)